Vision Logic 段階への道程

合理性段階の「自己」（self）は、「自律的自己」（the autonomous self）と形容される。それは、ひとりの主体として自らの責任において世界を観察し、情報を収集・処理することで、ひとつの整合性のある主張を構築することができる自己である。
Robert Kegan が指摘するように、こうした自己は総じて「自己充足感」（the sense of self-sufficiency）により特徴づけられる。それまでのように、社会的な規範や権威をはじめとする外的な価値体系に従属するかたちで自己を構築するのではなく、自らの責任において客観的な説得力をもつ主張を構築できることにたいする基本的な自己信頼感を獲得するのである。
たとえば、高等教育における論文執筆等の訓練では、生徒がある問題意識をもつ自律的な探求者であるという前提に立ち、その探究をより効率的・効果的なものにするための補助的なものとして諸々の道具を提供するのである。即ち、そこでは、あくまでも生徒が自律的な探求能力を有していることが前提とされているのである。
もちろん、これはあくまでもひとつの事例であるが、今日においては、日常的な業務活動や人間関係においても、同じように、外部の干渉を拒絶するところに成立する ひとりの個としての尊厳を基盤とした自己を前提とされている。そこでは、個人とは、単に指示されたり、命令されたりする存在ではなく、独自の価値観をもち、また、自らの責任において思考や判断をする存在であるという認識（人間観）のもとで人間関係が営まれるのである。
必然的に、そこには、同じ基本的な権利を保障された関係者が相互に対話・交渉・調整、あるいは、協力・競争・衝突する空間が生まれることになる。こうした文脈の中では、たとえば企業組織において、コーチング等の方法が重視されるのは、当然のことだといえるだろう（その意味では、対話を重視する文化は、必ずしも VL 的なものではなく、その基礎は合理性段階に構築されるといえる）。
しかし、合理性段階が熟してくると、この段階を特徴づける自己充足感が自己閉塞感（あるいは、孤独感や孤立感）を伴うものに「変化」してくる。即ち、自らの責任において構築した主張や世界観や構想が他者の批判や攻撃に耐えられる鉄壁なものに練磨されるほどに、逆にその主張や世界観や構想に呪縛されてしまい、そこから自らの思考や発想を解放することができなくなるのである。自己の構築・蓄積したものが自己を閉じこめる「檻」として感じられてくるのである。
異なる感覚・価値観・思考をそなえた他者にたいして興味をいだき、そうした人々との対話をとおして自己を相対化しようという興味や動機が芽生えるとき、合理性段階から VL 段階に向けた成長がはじまるといえる。それは、単に“I'm OK, You're OK”という態度をとることではなく、ある視点や立場や理論や論理に立脚して主張を展開することを通じて、不可避的に排除・抑圧される事実や側面や要素を積極的に探求しようとする態度として結実していくことになる。必然的に、そこでは、他者を知ることが、同時に自己を知るための有効な方法として認識されるのである。
関係性の中でそれぞれの関係者がひとつの対象を独自の視点をとおして観察・経験・解釈しており、また、それにもとづいた行動が他者に影響をあたえているという 関係者間の相互作用を認識するようになると、そこでは自然と関係性全体を見渡す俯瞰的な視点が芽生えてくることになる。価値判断を保留して、先ずそれぞれの関係者がどのような立場に置かれ、また、その結果として、どのような価値観をもつことになり、そして、どのような思考・発想・行動しているのかを　ある程度体系的に把握しようとするのである（前期 VL

段階）（『もののけ姫』）。
ただし、この段階では、あくまでも多様な視点の足し算をとおして、全体像を把握しようとするために、結局、全ての関係者を呪縛している構造的なダイナミクスに注意を向けることはないままに終わることになる。たとえば、前期 VL 段階においては、異なる視点や立場に立脚する関係者間の軋轢や衝突を緩和・仲裁することに関心が向かうが、そもそもそうした視点や立場を生み出している大局的・深層的なダイナミクスを見極めて、それに直接的にアプローチしようとする発想は得てして稀薄になる（例：今日 注目されている格差問題においては、総じて「富める者」と「富まざる者」との間の軋轢や衝突を解決するために、当事者間の対話や調停をしようと企図されるが、そもそもそうした格差を生じさせる構造的な問題そのものを問題視することはあまりない）。全ての関係者の視点を共感的に理解して、それらが共存できるように、必要な規則や仕組を考案しようとはするが、結局のところ、そうした状況を生み出している根本的・根源的な問題に言及しようとはしないのである。
中期 VL 段階とは、こうした限界を克服する段階であるといえる。それは、各関係者が置かれた文脈を理解するだけでなく、そうした多様な関係者が共有している集合規模の文脈や構造を見極めて、それそのものに言及していく段階である。換言すれば、全ての関係者を呪縛している集合的な構造（system）を俯瞰的にとらえる視点であるといえるだろう。
即ち、同時代に生きる人々が無意識の内に参画している「ゲーム」を対象化して、それが「ゲーム」であることを看破する意識であり、また、それを支配する諸々の規範や規則を超越して、「本質的」「本来的」「普遍的」な価値や法則にもとづいて生きようとする意識であるといえる。つまり、それは、同時代の中で共有されている幻影や幻想（「ゲーム」）に埋没して生きるのではなく、常に目醒めて生きようとする実存的な欲求にもとづいて生を営もうとする意識であるといえるのである。
たとえば、Viktor Frankl の思想は、同時代の中に生きることをとおして無意識の内に内面化される諸々の浅薄な価値観にたいして批判的な考察をするだけでなく、本質的には、人間存在としての最も基本的、且つ、根本的な営み——生きるということ・存在するということ・思考するということ・体験するということ・苦悩するということ——に注意を向けようとする。そして、それらの行為が本質的に内在させている「尊厳」を再確認することをとおして、われわれが人間として生きているそのことをとおして賦与されている尊厳を確認・回復しようとするのである。
時代の変化の中で日常生活を規定・支配するゲームの規則や形態はめまぐるしく変わることになる。しかし、人間社会とは、基本的に、その瞬間に目の前で展開しているゲームを現実と錯覚して、それに順応することを鼓舞するものであり、大多数の人々は、それを現実と信じて生きることになる。確かに、人間の内には、目醒めて生きることにたいする幽かな欲求は息づいているが、それは往々にして「騒音」に掻き消されてしまい、日常を対象化するための刺激や衝撃（例：危機的体験等の非日常的体験）をあたえられない限り、真に顕在化することはないのである。
Logotherapy とは、そのように所与の世界観や価値観の中で意味の構築ができなくなるときに意味を持ちはじめるものであるといえる。もちろん、全ての苦悩が VL が顕在化していることの証左ではないし、また、全ての治療が VL の確立を意図するものでもない。ただ

し、Logotherapy そのものは、VL 段階の苦悩に対処するための包容力をそなえているし、また、実際にこの方法の可能性を最大限に活用するためには、治療者そのものが VL 段階の意識構造を確立していることが必須の条件となるのは間違いないところであろう。
その意味では、VL というものに関する理解を深めるうえで、Logotherapy を勉強することは、VL 的な意味空間を視野に収めた探求するということがどのようなものであるのかを垣間見る貴重な経験となるのである。

ちなみに、「ゲームのルール」の急速な変化を先読みして、それに適応したり、あるいは、それを活用したりするための能力開発を謳う発想は、今日、戦略論や組織論等ではしばしば強調されるが、こうした問題意識は総じて合理性段階の論理を通して構築されている。というのも、そこでは、ゲームの中に投げ込まれたゲーム・プレイヤーとして自己を位置づける自己認識（identity）そのものは所与のものとされており、基本的に全ての思考や探求はそれを前提として営まれているからである。必然的にそこでは外部環境の変化に適応することを至上の価値とする適応主義的な発想が尊重されることになり、個人は、実質的に「適応できるのか、適応できないのか、あるいは、どれくらい適応できるのか」という非常に限定的な範囲の中で自らの生を舵取りしていくように迫られることになる。つまり、ゲームの変化や変遷を精緻に分析・予想することは奨励されるが、ゲームに参加をするという前提にもとづいて生を営むことを半ば強要する現代社会の構造そのものを問題視するような本質的探究は奨励されないのである（むしろ、実際には、そうした探求を蔑視するような構造が存在している）。結果として、人々は、ゲームの中に生じる課題や問題を解決はできるようになるが、ゲームが営まれることによって生みだされている課題や問題にたいしては対応ができないままになるのである。

What Postformal thought is, and why it matters
Michael Lamport Commons and Sara Nora Ross

Systematic Stage（前期 VL 段階）
At the Systematic stage, people solve multivariate problems. Sometimes this involves discriminating the frameworks in which relationships between variables are embedded. The systems of relationships are formed out of relations among variables. Thus, the elements that are coordinated by systematic task actions are multiple relations among abstract order variables. The tasks include: (a) determining possible multivariate causes—outcomes that may be determined by many causes; (b) the building of multivariate representations of information in the form of tables, matrices, diagrams, or narrative; and (c) the multidimensional ordering of possibilities, including the acts of preference and prioritization. Such actions generate systems of tendencies and relationships. Perceptions of such systems generated give the appearance of a single “true” unifying structure. Other systems of explanation or even other sets of data collected by adherents of other explanatory systems tend to be rejected. New findings that do not fit within the present system are often rejected out of hand. Most standard science operates at this order. At this order, science is seen as an interlocking set of relationships, with the truth of each relationship in interaction with embedded, testable relationships. Researchers carry out variations of previous experiments. Behavior of events isseen as governed by multivariate causality. Our estimates are that only 20 percent of the U.S. population now function at the Systematic stage without support.

例 1：Project Management（PM）。PM においては、同時に複数の変数（項目・要素）を考慮する必要がある。しかも、それらの変数は往々にして優先順位の付けにくいもので、刻々と変動する状況（文脈）に応じて、優先順位そのものも変化するものである。そうした変数の代表的なものとしては、たとえば、時間（time）・費用（money）・人的資源（human resources）・成果物の質（quality）・利害関係者の思惑（stakeholder）・Project Team 内の人間関係等があげられる。これらは基本的に同時に全て考慮されるべきものであるが——「これに関しては今は考慮をしない」という考慮もふくめて——これらはまた相互に関連をしているために、いくつかを恣意的にとりだして、それだけをとりあつかうということはできない。その意味では、PM 担当者は、全変数を意識に容れて、たとえ漠然とであれ、それらをひとつの「system」として把握できる必要があるのである。

例 2：身体的・精神的な症状の診断。身体的な症状は必ずしもひとつの器官や部位の病理に起因するものであるとは限らない。それは、いくつかの要因がある条件（例：温度・体調）のもと、特定の相互作用を起こすときに発生することもある。

個人は、「system」を認識することはできるが、基本的には、それを所与のものと認識している。即ち、それは「system」に囚われている存在であり、そのダイナミクスに適応していこうとする行動論理といえる。合衆国の人口の 20%がここに到達すると思われる。

Meta-systematic Stage（中期 VL 段階）
At the Meta-systematic stage, people can act on systems. The systems are as described earlier. Such systems of relations are the objects of Meta-systematic tasks or actions. Meta-systematic actions compare, contrast, transform, and synthesize systems. One can compare and contrast systems in terms of their properties, with a focus on the similarities and differences in each system's form, as well as constituent causal relations and actors within them. The products or results are Meta-systems sometimes referred to as supersystems. These complex understandings underlie the formulation of universal principles applicable to all, many, or even only specific contexts. Such principles are Meta-systems by definition. For instance, philosophers, some scientists, and others examine the logical consistency of sets of rules in their respective disciplines. Doctrinal lines are replaced by a more formal understanding of assumptions and methods used by investigators. As an example, we would suggest that almost all professors at top research universities function at this stage in their line of work. We estimate that 1 to 2 percent of people in the U.S. population now function at Meta-systematic stage without support.

これまでに所与のものとされていた system に主体的に働きかけることができる段階である。換言すれば、それは、system の中でそのダイナミクスに適応しながら、自己の行動を舵取りするのではなく（例：アシタカ）、system の構造そのものを変化させていく段階であるとえいえる。即ち、それは、その system を成立させている根本的な要素や条件を見極めて、それにアプローチすることで、system の変革そのものを戦略的に企図することができる段階であるといえる。
また、これは、複数の異なる system（文脈）に参画することができる段階である。そのすべてと精神的な距離を保ちながら、それらを俯瞰する意識を有する。それぞれの性質や特徴を認識して、それらを比較・分析することができる。また、複数の system を横断・超越して存在する共通点や深層構造や高次法則等を解明することができる段階である（例：人間の実存的条件）（但し、上記のように、ここには、そうした普遍的な法則が作用する文脈を限定・特定することも含まれる）。合衆国の人口の 1～2%がここに到達すると思われる。

例：「構造改革」の設計と誘導（c.f.,『円の支配者』）
例：Ken Wilber『意識のスペクトル』　心理学の領域の中に存在する多様な方法（system）を吟味して、それらを横断して存在する上位の概念や法則を特定する。そして、それにもとづいて、それらの system を統合する meta-system を構築・提案する。

Paradigmatic Stage（後期 VL 段階）
At the Paradigmatic stage, two things are done. People create new paradigms out of multiple meta-systems. Or they show the impossibility of doing so. Thus, the objects of paradigmatic task actions are meta-systems. A paradigm is a systematized set of relations among meta-systems that reflects a coherent set of assumptions. In a domain, sometimes the highest stage development is to show that meta-systems that are incomplete and that adding to them would create inconsistencies. No further stages in that domain on that sequence are then possible (Sonnert and Commons, 1994).

Usually, a paradigm develops out of recognizing a poorly understood phenomenon or collection of phenomena. Paradigmatic actions integrate meta-systematic understandings and principles that may appear unrelated to the original field of the thinkers. Individuals who reason at the Paradigmatic order have to see the relationship between very large and often disparate bodies of knowledge in order to reflect on, compare, contrast, transform, and synthesize multiple principles and Meta-systems. Paradigmatic action requires a tremendous degree of decentration. One has to transcend tradition and recognize one's actions as distinct and possibly troubling to those in one's environment. At the same time, one has to understand that the laws of nature operate both on oneself and one's environment. This unity enables one to generalize learning and pattern-recognition in one realm to others.
Examples of Paradigmatic order thinkers drawn from the history of science are discussed in "The Connection Between Postformal Thought and Major Scientific Innovations," this issue. We estimate that fewer than .05 percent of people in the U.S. population now function at Paradigmatic stage without support.

合衆国の人口の 0.5%がここに到達すると思われる

例：Ken Wilber 『進化の構造』（Sex, Ecology, Spirituality） 世界に存在する多様な領域を俯瞰して、各学問領域・探求領域を meta-system として整理して、さらにそれらをひとつのパラダイムの中に統合する。

Cross-Paradigmatic Stage（Psychic Stage）
The fourth postformal stage is the cross-paradigmatic. The objects of cross-paradigmatic actions are paradigms. The task at this stage is to integrate paradigms into a new field or profoundly transform an old one. A field contains more than one paradigm and cannot be reduced to a single paradigm. The cross-paradigmatic thinker reflects on, compares, contrasts, transforms, and synthesizes existing paradigms. One might ask whether all interdisciplinary studies are therefore crossparadigmatic, for example, whether psychobiology is cross-paradigmatic. That is not the case. Such interdisciplinary studies might create new paradigms with their own systematized set of relations among Meta-systems, reflecting a coherent set of assumptions such as psychophysics, but not new fields.
This stage has not been examined in much detail because there are very few people who can solve tasks of this complexity. It may also take a certain amount of time and perspective to realize that behavior or findings were cross-paradigmatic. All that can be done at this time is to identify and analyze historical examples. Such examples are included in "The Connection Between Postformal Thought and Major Scientific Innovations," this issue.

パラダイムとパラダイムを比較・統合する。ときとして、統合をしようとすると、パラダイムがその整合性を維持することができなくなるという状況がある。その場合には、「統合はできない」という可能性を指摘するという解もありえる。

例：Ken Wilber の「統合的」パラダイムと Rudolf Steiner の統合的パラダイム——共に Body・Mind・Heart・Soul・Spirit を包含する——を比較・統合する（両者の統合は不可能であるという可能性も含めて）。
事例の不足のために、人口に占める割合は不明。